

道元と如浄 (七)

——『如浄禪師語録』到来を中心に——

伊 東 洋 一

七 正法眼藏葛藤（続）

釋迦牟尼佛の正法眼藏無上菩提を證傳せること、靈山會には迦葉大士のみなり。嫡嫡正證二十八世、菩提達磨尊者にいたる。云々⁽¹⁾

岡田宜法氏はその『正法眼藏思想大系』において、この冒頭の言葉を始めとして「全巻に證契正嗣の教示が横溢してゐる」として、この葛藤の巻を「嗣法」の部に分類している。⁽²⁾ そうであれば、興聖寺最後の説法が嫡嫡相承の嗣法の問題だということになる。それではその嗣法のあり方はどのようなものであろうか。

1
…初祖かつて般若多羅尊者のみもとにして、佛訓道骨、まのあたり證傳しきたれり。根源をもて根源を證取しきたれり、枝葉の本とせるところなり。

おほよそ諸聖ともに葛藤の根源を截断する參學に趣向すといへども、葛藤をもて葛藤をきるを截断といふと參學せず、葛藤をもて葛藤をまつふとしらず。いかにいはんや葛藤をもて葛藤に嗣續することをしらんや。嗣法これ葛藤としれるまれなり、きけるものなし。道著せる、いまだあらず。證著せる、おほからんや。⁽⁸⁾

これによつてみれば、嗣法のあり方は「根源をもて根源を證取」することだ、ということになる。すなわち聖者とされる人々は誰れでも、蔓草のようにまつわる煩惱（葛藤）を断ち切つて悟りを得ようとするが、実はその断ち切るということが「葛藤をもて葛藤をきる」ことだと學ばない、あるいは「葛藤をもて葛藤をまつふ」ことだと知らない、という。「根源をもて根源を證取」するとは、「葛藤をもて葛藤をきる」、「葛藤をもて葛藤をまつふ」と言い換えることもできる。それではこれらのことは一体どのようなことであらうか。岡田宜法氏は『聞解』の「葛藤を以て葛藤をまつふは法を以て法をまつふ根源迷はぬと知る也」⁽⁴⁾を根拠にして次のように註している。すなわち「根源をもて根源を證取」するとは、「佛性をもて佛性を證取すと置き換へて見てもよい。……能所彼此と云ふ差別觀念や、對待の念慮を離れて見ると、葛藤には元より根なしと了知すること」であり、「葛藤をもて葛藤をきる」とは「法を以て法を截断する」こと、「葛藤をもて葛藤をまつふ」とは「佛が佛を求めたり、牛に騎つて牛を覓める」ことだといふ。⁽⁵⁾そうしてみると嗣法のあり方は差別、對待觀を離れ、仏性の仏性に、仏法の仏法に、仏祖の仏祖に嗣法相統することである。そしてこのような嗣法のあり方こそ葛藤だといふのである。

ところでこのことを知り、証し、道い得たのは古今一人先師如淨禪師古仏だけだとして、その『語録』の中の「佛成道上堂。瞿曇臘月八。夜半走出山賊。路羊腸曲。偷心虎背斑。鈍置人天者一番。天童恁麼擡舉。且道。該當也無。落賺兒孫頭盡禿。葫蘆藤種纏葫蘆」⁽⁶⁾から最後の一句を引用し

この示衆、かつて古今の諸方に見聞せざるところなり、はじめて先師ひとり道示せり。胡蘆藤の胡蘆藤をまつふは、佛祖の佛祖を參究し、佛祖の佛祖を證契するなり。たとへばこれ以心傳心なり。⁽⁷⁾

と註するのである。そうしてみると、「根源をもて根源を證取」するとか、「葛藤をもて葛藤をきる」とか、さらに「葛藤をもて葛藤をまつふ」と云ったことは、すべて先師如淨禪師の言葉から出ていたことを知りうるのである。

もしそうだとすれば、今数日を経ずしてこの宇治を捨てて越前に新天地を求めて旅立とうとするまことに身辺忽々の時に當って、道元の脳裏をかすめるのは、ただ嫡々相承の嗣法と先師如淨禪師古仏のことであった、と云わざるをえない。こうしてこの巻が嗣法を問題にしていること、そして嗣法が問題になれば嗣法と密接に関係をもつ如淨禪師が大きく意識され、意識されれば如淨禪師の『語録』の中の「胡蘆藤の胡蘆藤をまつふ」から嗣法を「葛藤」としてこの巻の名称とした理由もさこそと推測もされるのである。

他方われわれの問題、「如淨禪師語録」の到来は道元にいかなる影響を及ぼしたか、要するに「身心脱落」か「心塵脱落」かの観点に立つ時、嗣法を語るこの巻はまことに不思議な内容を語っている様に思われる。以下段落を追ってこの問題を考えてみよう。

第二十八祖謂門人曰、「時將至矣、汝等盍言所得乎。」時門人道副曰、「如我今所見、不離文字、不離文字、而爲道用。」祖曰、「汝得吾皮。」尼總持曰、「如我今所解、如下慶喜見阿閼佛國、一見更不^ニ再見^上。」祖曰、「汝得^ニ吾肉。」道育曰、「四大本空、五陰非有、而我見處、無^ニ一法^上可得。」祖

曰、「汝得^{マリ}ニ吾^ガ骨^ヲ」最後^ニ慧可^ニ、禮三拜^{シテ}後、依^テ位^ニ而立^ツ。祖曰、「汝得^{マリ}ニ吾^ガ髓^ヲ」果^{シテ}爲^{シテ}三祖^ト、傳法傳衣^{セリ}。(8)

さて嫡々相承の嗣法が葛藤（「嗣法これ葛藤」）ということとは、それでは理論的にどうしてそうなるのか。道元はそれを説明するのにこの巻では、初祖達磨大師の伝法の話、つまり四人の門弟との皮肉骨髓の問答と趙州從諗の皮肉骨髓論を以てしている。右は『景德伝燈録』にある達磨伝法の話である。ところで道元によれば、この話は普通次のように解釈されるという。

…、正傳なきともがらおもはく、四子^{おの}各^{おの}所解に親疏あるによりて、祖道また皮肉骨髓の淺深^{せんじん}不同なり。皮肉は骨髓よりも疏なりとおもひ、二祖の見解すぐれたるによりて、得髓の印をえたりといふ。かくのごとくいふいは、いまだかつて佛祖の參學なく、祖道の正傳あらざるなり。(9)

すなわち、達磨大師はその四人の門人の所見に従って皮、肉、骨、髓を与え、最後に所見を述べた慧可を二祖として伝法伝衣したというのであるから、この皮、肉、骨、髓乃至四人の門人を疎から親、浅から深、要するに価値的優劣の関係と見る、というのが普通一般の解釈で、これがいかに仏法と懸け離れたものであるか、またこのような見方が出てくるのは「佛祖の參學」なく、「祖道の正傳」ない為である、というのである。それでは仏道に立てばどうなるか。

いま參學すべし、初祖道の汝得吾皮肉骨髓は祖道なり。門人四員、ともに得處あり、聞著あり。その聞著ならび

に得處、ともに跳出身心の皮肉骨髓なり、脱落身心の皮肉骨髓なり。知見解會の一著子をもて、祖師を見聞すべきにあらざるなり。能所彼此の十現成に⁽¹⁰⁾あらず。

ここではつまり、「汝得吾皮肉骨髓」というのは初祖達磨大師という仏祖の言葉である。そして門人四人の得るところ、聞くところは共に「跳出身心の皮肉骨髓」であり、「脱落身心の皮肉骨髓」であるという。ところでこの「跳出身心」とか「脱落身心」（傍点筆者）といわれるものはどのような意味であろうか。それは次の「知見解會の一著子をもて、云々」とか、「能所彼此の云々」ということからいって、能と所、彼と此あるいは主観と客観（知見解會＝思慮分別心）とか要するに對立観、差別観を排することと解されるのである。事實道元は続いて次のように述べる。

しるべし、祖道の皮肉骨髓は、淺深にあらざるなり。たとひ見解に殊劣ありとも、祖道は得吾なるのみなり。その宗旨は、得吾髓の爲示、ならびに得吾骨の爲示、ともに爲人接人、拈草落草に足不足あらず。たとへば拈華のごとし、たとへば傳衣のごとし。四員のために道著するところ、はじめより一等なり。祖道は一等なりといへども、四解かならずしも一等なるべきにあらず。四解たとひ片片なりとも、祖道はただ祖道なり。⁽¹¹⁾

ここで冒頭の達磨大師の皮肉骨髓は淺深といった価値的差別を述べたものでない、ということはいとして、それに続く言葉は不用意に読み過ごせないように思われる。意味をとってみよう。たとい見解（理解）に優劣があつても、達磨大師のいうのは「吾を得た」（得吾）ということだけである。その理由は「吾が髓を得た」、「吾が骨を得た」（皮、肉もこれに準じる）という示し方はいずれも人の爲にし人に接し、向上向下といった教化教導の手段（拈

草落草)であつて、十分であるとか十分でないといった相違があるのではない。たとえば、釈尊が拈華して迦葉が微笑したという故事にしても、それは決して迦葉にのみ仏法を伝えたというのではないであらうし、伝衣にしても初祖が二祖のみに衣を伝えたのでないと同様である。達磨大師が四人の門人にそれぞれ云ったことは、初めから同一であつて差別はない。このように達磨大師の言われたことは同一であつても、四人の門人の見解(理解)は同一ではない。

四人の門人の見解(理解)が別々であつても、達磨大師のいわれたことはやはり達磨大師のいわれたことである。このように意味をとることができるとすれば、それは祖師の一つの言葉、すなわち同一の言葉も、それを聞く聞き手の門人の見解、理解、受けとり方によつて色々である。しかもその色々様々の理解、受けとり方に価値的差別があるのでないとするば、それはどういふことになるか。ここで道元の「身心脱落」を想わずにいられない。師である如浄が「心塵脱落」といい、門人である道元がそれを「身心脱落」と聞いたと仮定して、道元はこの問題に答えようとしているのではないか。『葛藤』の巻のこの箇処に、「脱落身心」という言葉が珍らしく出てくるのも、そのような考えに至らせる一つである。またこの達磨大師と門人の皮肉骨髓に対する道元のコメントは執拗と思われるほど続くのである。なおそれを追つてみよう。

おほよそ道著と見解と、かならずしも相委^{しやうゐ}なるべからず。たとへば、祖師の四員の門人にしめすには、なんぢわが皮吾をえたりと道取するなり。もし二祖よりのち百千人の門人あらんにも、百千道の説著あるべきなり、窮盡あるべからず。門人ただ四員あるがゆゑに、しばらく皮肉骨髓の四道取ありとも、のこりていまだ道取せず、道取すべき道取おほし。^(四)

ここも言ったこと（道著）とその理解乃至受けとり方（見解）、換言すれば言葉とその解釈といってもよい両者の関係である。それは必ずしも合致（相委）しない。達磨大師が四人の門人に対して言ったことが同じであっても、聞き手の方では人によって「汝はわが皮によって我れを得た」（なんぢわが皮吾をえたり）と受けとることもなる。二祖以後何千何百という門人があるとすれば、言い方も何千何百とあつて、限りがない。門人が四人だったから、皮・肉・骨・髓といったまでである。

しるべし、たとひ二祖に爲道せんにも、汝得吾皮と道取すべきなり。たとひ汝得吾皮なりとも、二祖として正法眼蔵を傳附すべきなり。得皮得髓の殊劣によれるにあらず。

また道副・道育・總持等に爲道せんにも、汝得吾髓と道取すべきなり。吾皮なりとも、傳法すべきなり。祖師の身心は、皮肉骨髓ともに祖師なり。髓はしたしく、皮はうときにあらず。¹³

たとい二祖に云う場合でも「汝は吾が髓を得た」と云わず、「汝は吾が皮を得た」と云うべきである。そう云う場合でも二祖として正法眼蔵を傳授すべきである。それは皮や髓に優劣といった価値的序列があるのではないからである。また慧可以外の三人の門人である道副、道育、總持に云う場合でも「汝は吾が髓を得た」と云うべきである。たとい皮であつても法を伝えるべきである。その訳は、祖師の身心は皮・肉・骨・髓のどれをとらえても祖師なのであつて、髓が祖師に親で皮は疎であるのではないからである。このような意味であるとすれば、それはまた道元の「身心脱落」を「汝得吾皮」にそっくりそのまま置き換えてみることも可能のように思われるのである。如淨禪師が「心塵脱落」と語るべきところを對機說法からたとえ「身心脱落」と道元に向つて語つたとしても、また道元がそれを受

けて「身心脱落」と聞いたとしても、「得皮得髓の殊劣」がない、つまり「心塵脱落」と「身心脱落」との優劣がない、如淨の身心の皮、髓であつてもどちらも如淨の身心であることに変わりがなく、一方が如淨に親しく、他方が如淨に疎であるというのではない、とこのように読みとることの可能性も生じるように思われるのである。更に先きを追ってみよう。

いま參學の眼目をそなへたらんに、汝得吾皮の印をうるは、祖師をうる參究なり。通身皮の祖師あり、通身肉の祖師あり、通身骨の祖師あり、通身髓の祖師あり。通身心の祖あり、通身身の祖師あり、通心心の祖師あり。通祖師の祖師あり、通身得吾汝等の祖師あり。これらの祖師ならびに現成して、百千の門人に爲道せんとき、いまのごとく汝得吾皮と説著するなり。百千の説著、たとひ皮肉骨髓なりとも、傍觀いたづらに皮肉骨髓の説著と活計すべきなり。もし祖師の會下に六七の門人あらば、汝得吾心の道著すべし、汝得吾身の道著すべし。汝得吾佛の道著すべし、汝得吾眼睛の道著すべし、汝得吾證の道著すべし。いはゆる汝^キは、祖なる時節あり、慧可なる時節あり。得の道理を審細に參究すべきなり。⁴⁴

ここでは、いま參學の見識がそなわつてきて、「汝は吾が皮を得た（「汝得吾皮」）」との印可を得るのは祖師の全体を得る參究をしたのであると前置きして、次のように述べている。先ずそのような全体的祖師として、全身これ皮という祖師（「通身皮の祖師」）、全身これ肉という祖師、全身これ骨という祖師、全身これ髓という祖師、全身これ心という祖師、全身これ身という祖師、更に全心これ心という祖師、全体がこれ祖師という祖師になりきつてゐる祖師、全身がこれ吾の汝を得ている等の祖師がある。そうしてこれらの祖師がすべて仏道を成就して何百何千の門

下のために語る時、いまのように「汝は吾が皮を得た（「汝得吾皮」）」と説くのである。その何百何千の門下に云うのに、たとえ（平等の立場から）皮、肉、骨、髓をもって云ったとしても、第三者はただ普通の意味の皮、肉、骨、髓、すなわち差別をつけた皮、肉、骨、髓を説いたものと思ひ誤ってしまう。しかしそうではないのであって、もし祖師の門下に六、七人があるならば、「汝は吾が心を得た（汝得吾心）」、「汝は吾が身を得た（汝得吾身）」、「汝は吾が眼を得た（汝得吾眼）」、「汝は吾が悟りを得た（汝得吾證）」とも説いたであろう。そしてその「汝」というと、それが祖師である場合があり、また慧可である場合もある。そのことを理解するには「得」の道理を詳細に究明しなくてはならない、というのである。

そうしてみると、ここでもいわば真理は一つであっても、その説き方は何百何千とある、と語っているようである。勿論そのためには、参学の見識がそなわり、全体を得る参究が条件になつてはいる。とに角師は色々の現われ方をし、色々の説き方をするのである。

それでは次にその鍵になる「得」の道理に移ってみよう。

しるべし、汝得吾あるべし、吾得汝あるべし。得吾汝あるべし、得汝吾あるべし。祖師の身心を参見するに、内外一如なるべからず、渾身は通身なるべからずといはば、佛祖現成の國土にあらず。皮をえたらんは、骨肉髓をえたるなり。骨肉髓をえたるは、皮肉面目をえたり。ただこれを盡十方界の眞實體と曉了するのみならんや、さらに皮肉骨髓なり。このゆゑに、得吾衣なり、汝得法なり。これによりて、道著も跳出の條條なり、師資同参す。聞著も跳出の條條なり、師資同参す。師資の同参究は佛祖の葛藤なり、佛祖の葛藤は皮肉骨髓の命脈なり。拈華瞬目、すなわち葛藤なり。破顔微笑、すなわち皮肉骨髓なり。

さらに參究すべし、葛藤種子すなわち脱體の力量あるによりて、葛藤を纏遶する枝葉華果ありて回互不同互なるがゆゑに、佛祖現成し、公案現成するなり。⁰⁴⁸

「汝が吾を得る」、「吾が汝を得る」、「吾の汝を得る」ということもあるう、という。このような汝と吾の轉換はどうして可能なのであらう。この箇所を註解書に求めてみる。先ず『聞解』は、「……上に向けば汝は祖なる時節あり、何で有らうとも得ると云ふ道理を合點するがよい、手前からいへば吾得^レ汝、向ふからいへば汝得^レ吾、吾と汝と不二能所一枚、故に吾と汝と一枚、四哲と祖師と不二也⁰⁴⁹」と註し、『私記』は、「汝得吾に前後なきをきこへて、汝得吾、吾得汝等あるべしといへり」⁰⁵⁰と註し、『御抄』は、「是は汝與吾の無差別事を被釋也、汝と云詞、打任は吾に對していはるゝ也、我と云詞も對汝云べし、しかるを今の汝は、己汝亦如是、吾亦如是、乃至西天初祖亦如是と云ゆへに汝與吾總て非二物相對義也、汝と云時は、我は汝に藏身し、我と云時は汝は我に藏身するなり、かるが故に、初祖の汝得の御詞は、對四人門人被仰に似たれども、只汝は汝を得、我は我を得る也、達磨は達磨を得たりと云程の義也⁰⁵¹」と註し、『辨註』は、「回互の語句なり、汝は祖なる時節ありとは、汝得の語は、般若多羅の達磨に相見の時、今の祖師達磨に汝なり、達磨の今日は二祖慧可に汝なる時節なり、然則師弟同如有時の汝なり、今古仏の時に於ても爾なり、汝亦吾亦なり⁰⁵²」と註する。そうしてみると、汝と吾とは「二物相對の義に非ざる也」で、「不二能所一枚」、「前後な」く、「無差別事」であることになる。

さて一通り訳を続けてみる。このような得の道理に立てば、祖師の身心においても「内外一如」、「渾身は通身」ということになり、皮をえたら骨肉髓をもえたのである。骨肉髓をえたのは、皮肉をも面目をもえたのである。それはたゞ全十方世界の真実のありようがそうだと先徳が云うだけで、そうなのではない。皮肉骨髓という部分が全体を

表わしているからである。だからこそ「吾が衣（正統の法脈）を得た」、「汝は法を得た」ということになる。こういう風にして、師の説法も対立差別を超出したそれ自身の説法であり、聞く方の弟子も対立差別を超出したそれ自身の聞法であって、師弟共々少しも異なるところがなく仏道に与っている。このような師弟が一つに仏道に与ることが「仏祖の葛藤」なのである（してみると「葛藤」は単に蔓草がまといつくといった意味でなく、「仏祖の葛藤」として師弟の関係の親密さといった意味になるであろう）。そしてこの師弟関係の親密さこそ仏法正伝の生命（「仏祖の葛藤は皮肉骨髓の命脈なり」）である。釈尊が拈華して瞬目したのが葛藤であり、迦葉がそれに応じて微笑したのがすなわち皮肉骨髓である、といってもよい。更に進んでこう云うこともできる。葛藤の種子、すなわち親密な師弟関係を作る原因には、それ自身対立を超出する力があることから、技業としての修行・日常行為を展開し、花果としての悟りや寂靜となり、それらが葛藤をめぐって互に関係し合い、仏祖を実現し、公案（悟り）も実現するのである、と道元は云うのである。

それではここで先ず註解書の解から振りかえってみる。『聞解』は、汝と吾の一如を説いて「四哲と祖師と不二」をいい、『御抄』は汝と吾の「非二物相對」「無差別事」として「藏身（身をかくす）」を持ち出し、現われにおいてはそれ以外の現われはない（全機現成）とし、『辨註』は「回互の語句なり」として、すなわち回互（相依相存）は不回互（独立自存）と対するが、しかし別々のものと見ないで、回互の中に不回互、不回互の中に回互が含まれるとしている。また『聞解』は「汝亦如是、吾亦如是」といい、これは『辨註』の「汝亦吾亦」と共に、いうまでもなく六祖慧能の南岳懷讓への印可の言葉で、師資一如を語っている。こうしてみると、註解書の解はもとより本文の言葉に資道元と師如浄をどうしても当てはめたくないのである。そして師資関係が如浄と道元の関係だとすれば、それは「心塵脱落」と「身心脱落」の関係である。道元が「師弟関係の親密こそ正法正伝の生命」と語る時、それは単に

嗣法の一般論としてでなく、一見これまでの示衆と同じく乱れのない論理性をもって語るその言葉の中に、道元の師如浄に対する熱いまなざしと「身心脱落」の問題に対する思い入れを感じざるを得ないのである。

本文に立ちかえって、まず「皮をえたらんは、骨肉髓をえたるなり」という言葉であるが、これは部分が全体を表わすという思想であろうが、皮を道元の「身心脱落」、骨肉髓を如浄の真意と読みこむことも可能に思われるのである。兎に角この部分が全体を表わすという立場は、それがただ全十方世界の真実のありようがそうだからという一般論に満足せず、皮肉骨髓という部分が全体を表わしているとするところに、部分に徹している様子が現われているといえよう。しかしまた説く者（師）聞く者（資）それぞれが独自性を有しながらも、しかも差別対立を超出している点で少しも異なるところがない、とするのである。ここまできると、道元が嗣法を「葛藤」と名づけた理由も頷けてくるように思われる。それは嫡嫡相承などと云っては生ぬるい、そこには熱いまなざしや思い入れがこめられた道元の如浄に対する特別の師資関係が読みこまれて「葛藤」なる表現となったのであろうからである。

趙州眞際大師、示衆云、迦葉傳_二與阿難_一、且道、達磨傳_二與什麼人_一。因僧問、「且如_二三祖得髓_一、又作麼生。」師云、「莫_レ謗_二三祖_一。」師又云、「達磨也_レ有語、在外者得_レ皮、在裏者得_レ骨。且道、更在_レ裏者得_二什麼_一。」僧問、「如何是得髓底道理。」師云、「但識_二取皮_一、老僧者裏、髓也不立。」僧問、「如何是髓。」師云、「與麼即皮也摸未著。」

皮肉骨髓論に関しては以上で十分と思われるのに、執拗にも更に趙州從諗の言葉を持ち出す。その理由として岡田宜法氏は、『聞解』の「達磨の附_二囑_一三祖」したことは人の知れる處なれども、甚麼人に附すと云ふ師資の間に遣り取り無きを明す⁽²⁾を引いているが、われわれの観点に立つと、師資相承の嗣法についてはいくら語っても語り切れない

道元の思い、つまり「身心脱落」をめぐるの嗣法の正統性、真実性についての道元の切ない思いをそこに感ぜずにはいられないのである。

しかあればしるべし、皮也模未著のときは、髓也模未著なり。皮を模得するは、髓もうるなり。與麼即皮也模未著の道理を功夫すべし。如何是得髓底道理と問取するに、但識取皮、老僧遮裏、髓也不立と道取現成せり。識取皮のところ、髓也不立なるを、眞箇の得髓底の道理とせり。かるがゆゑに、二祖得髓又作麼生の問取現成せり。迦葉傳與阿難の時節を當觀するに、阿難藏身於迦葉なり、迦葉藏身於阿難なり。しかあれども、傳與裏の相見時節には、換面目皮肉骨髓の行李をまぬかれざるなり。これによりて、且道、達磨傳與什麼人としめすなり。達磨すでに傳與するときは達磨なり、二祖すでに得髓するには達磨なり。この道理の參究によりて、佛法なほ今日にいたるまで佛法なり。もしかくのごとくならざらんは、佛法の今日にいたるにあらず。この道理、しづかに功夫參究して、自道取すべし、教他道取すべし。

趙州從諗の語は皮肉骨髓の四者一体一如であるのに、僧の立場はどこまでも各別で差別觀にとらわれ、救いようがない。趙州は終に「そんなことだったら、皮ですら搜しあてることができないだろう」と最後の反省を促す。この段からは趙州と僧との問答の評釈で、それは「模未著」から、すなわち問答の最後から辿ることによってこの問答の成立を根拠づけているようである。それは兎に角ここで、皮を搜してみつからぬ時は、髓も見つからず、皮を搜して得られる時は、髓も得られるとか、皮を識るところには、髓の立つ余地がないとか、「藏身」とかいった説明に不二一如の立場が見られる。殊に「藏身」（この言葉の意味については先に述べた）ということと迦葉と阿難の伝法を語つ

ているのは注目される。その伝法の際には、面・目・皮・肉・髓の全体が違ってゆく。一（阿難）が他（迦葉）に奪換される。このように変った人が「達磨傳與什麼人」の「什麼人」だといふのである。

在外者得皮、在裏者得骨、且道、更在裏者得什麼。いまいふ外、いまいふ裏、その宗趣もとも端的なるべし。外を論ずるとき、皮肉骨髓ともに外あり。裏を論ずるとき、皮肉骨髓ともに裏あり。

しかあればすなはち、いま四員の達磨、ともに百千萬の皮肉骨髓の向上を條條に參究せり。髓よりも向上あるべからずとおもふことなかれ、さらに三五枚の向上あるなり。

趙州古佛のいまの示衆、これ佛道なり。自餘の臨濟・徳山・大瀉・雲門等のおよぶべからざるところ、いまだ夢見せざるところなり。いはんや道取あらんや。近來の杜撰の長老等、ありとだにもしらざるところなり。かれらに爲説せば、驚怖すべし。

ここで「外を論ずるとき皮肉骨髓ともに外、裏を論ずるとき皮肉骨髓ともに裏」とは、「外の外に内なく、内の外に外は無い、従つて師資一如、能所一枚」²⁴のことで、したがつてこの立場からすれば、四人の門人皆達磨である。しかもそれは四人に限らず無数にある、という。これは真理は一つであるが、その表現、説き方は無数にある、といつてよいことであろう。そしてこの趙州の示衆こそ真の仏道であつて、「近來の杜撰の長老等」はこんなことがあるとさえ知らず、それを聞いたら驚きおそれるに違ひない、という。ところでこの「近來の杜撰の長老等（近來のお粗末な長老たち）」とは誰れを指したものであろうか。それは一般的に云つたというよりも、もっと具体的に、例えば道元の「身心脱落」に異を挟む人々が當時いて、その人々を指したのではないかとすら想像を逞しくさせられるので

ある。

雪竇明覺禪師云、趙睦二州是古佛也。

しかあれば、古佛の道は佛法の證驗なり、自己の曾道取なり。

雪峯眞覺大師云、趙州古佛。

さきの佛祖も古佛の讃歎をもて讃歎す、のちの佛祖も古佛の讃歎をもて讃歎す。しりぬ、古今の向上に超越の古佛なりといふことを。

しかあれば、皮肉骨髄の葛藤する道理は、古佛の示衆する汝得吾の標準なり。この標格を功夫參究すべきなり。

最後に「古佛」を以てしめ括る。道元における「古佛」の意義についてはこれまでに触れてきた。しかしいま趙州こそ古佛と云う故以のものは何であろうか。思うに、「古今の向上に超越の古佛」（これを、古今の古仏をしのぐ古仏の意と、古仏とは、古今にすぐれてどこまでも向上し超越していくもの、の両義に解して）、「皮肉骨髄の葛藤する道理」、「汝得吾の標準」の語から解して、それは関係の複雑なからみ合い、微妙な関係、円融無際、自由無礙な轉換を可能にする力量（論理）のことではないであろうか。

また初祖は西歸するといふ、これ非なりと參学するなり。宋雲が所見、かならずしも實なるべからず、宋雲いかでか祖師の去就をみん。ただ祖師歸寂ののち、熊耳山にをさめたてまつりぬるとならひしるを、正學とするなり。

ところでここで達磨西歸は正覺でないとするのは、どのような意味であろうか。それには『私記』の解が参考になる。すなわち『私記』は、「達磨不來東土のゆゑに、西歸なきなり、……」と云う。達磨は東土に来ていないのである。ということは、例えば先の趙州の言葉でいえば、「達磨傳_ニ與什麼人_ニ」で、達磨は二祖に何物も伝与しないのである。二祖に伝与したと思うのは、二祖を侮辱することになるという。達磨は達磨で全機現成、二祖は二祖で全機現成である。嗣法とは正にこうしたものである。そうしてみると、ここでも如浄と道元の関係を当てはめてみずにはおれない。『葛藤』の巻を結ぶ言葉であることから云っても、道元の「身心脱落」についての強い自信のほどが読みとれるように思われるのである。

以上『葛藤』の巻の本文に即して見てきたが、道元によれば要するに葛藤とは、嗣法のことつまり親密な師資関係のことであつて、その関係は葛（かずら）や藤（ふじ）のようにからみ合う複雑な論理的構造をもっているというのである。そして小論はそこに、道元が絶えず「身心脱落」を念頭においてこの嗣法論を展開しているらしいことを見たのである。そうなると、この巻の検討の冒頭においてみた道元が宇治の興聖寺を捨て越前に向う動機理由にこのこと、先に先師如浄への思慕の情とした具体的内容として、「身心脱落」の問題が絶えざる関心事であつたことを附加しなくてはならない。

注

- (1) 大久保道舟編集『道元禪師全集』上巻、三三一頁。
- (2) 岡田宜法著『正法眼藏思想大系』第八巻、一九七頁。
- (3) 前掲『道元禪師全集』上巻、三三一頁。
- (4) 『正法眼藏註解全書』第六巻、一五〇頁。
- (5) 前掲『正法眼藏思想大系』第八巻、一九八〜一九九頁。

- (6) 『大正新脩大藏經』第四十八卷、「諸宗部」五、一二八頁中。
 (7) 前掲『道元禪師全集』上卷、三三一頁。
 (8) 同右、三三二頁。
 (10) 同右。
 (12) 同右、三三二〜三三三頁。
 (14) 同右、三三三頁。
 (16) 前掲『正法眼藏註解全書』第六卷、一六〇頁。
 (17) 同右、一六一頁。
 (19) 同右、一六二頁。
 (20) 前掲『道元禪師全集』上卷、三三四頁。
 (21) 前掲『正法眼藏註解全書』第六卷、一六六頁。
 (22) 前掲『道元禪師全集』上卷、三三四頁。
 (23) 同右、三三五頁。
 (24) 前掲『正法眼藏思想大系』第八卷、二二二頁。
 (25) 前掲『道元禪師全集』上卷、三三五頁。
 (26) 「道元と如浄」(一)、三〜四頁、及び同内。
 (27) 前掲『正法眼藏註解全書』第六卷、一七五頁。
 (28) 前掲『道元禪師全集』上卷、三三五頁。
 (29) 前掲『正法眼藏註解全書』第六卷、一七五頁。
 (30) 増谷文雄氏は、越前行の動機として、「道元の内なる思想の新しい展開」を問題とし、結局『語録』到来による「如浄の影
 響をほかにしては考えられない」とされている。同氏著『現代語訳正法眼藏』月報四、五、六及び同氏著『臨済と道元』
 参照。
- (9) 同上。
 (11) 同上。
 (13) 同上、三三三頁。
 (15) 同上、三三三〜三三四頁。
 (18) 同上。